

【小説】 七色春日 【イラスト】 魁李

きよく ち れん あい
極 地 恋 愛

2

試し読み版



CONTENTS

序 章		007
第一章	潔白日記	009
第二章	大匙一杯	061
第三章	人間迷路	094
第四章	友情枯死	165
第五章	常闇開眼	220
第六章	現世天獄	253
終 章	白煙散海	292
アフターエンディング		300

序章

あばら屋の中にコウモリが羽音を鳴らして入ってきた。天井と壁の境目に大穴が開いているせいだ。屋根を支える梁材に逆さにぶら下がってマントのような黒翼を休め、丸く黒いつぶらな瞳でこつちを見る彼を食用にできるかどうか悩んだ。

悩んでいる時間は少なかった。真夜中ということもあつて身体がだるく、狩りをしようにも身に力が入らない。

島暮らしで常に気を張り続けていた。久方ぶりのまともな屋根の下での休息のせいか俺の緊張は緩んでいる。そして日々の労働による疲労が色濃く肉体に反映され、くたびれてしまっている。

両手に持った学習ノートに意識を戻した。風雨にさらされていたせいでページがくっついていて開く度にぺりぺりと音がする。文字は欠落していたり、書きなぐつてあるせいで読み取りにくかったり、話の前後で

文字を解読しなければならなかったが内容は概ね把握できた。

「ねえヒロト」

俺を呼ぶ声はぼんやりしていて、やや間延びしていた。寝ぼけ眼を指でこする赤音はベッドで横になりながらもあくびを押さえた。陶器皿で燃えるロウソクの炎が気になるのか、瞳が灯火に向かうと目をしきりにばちはちさせていた。

座机を前にしてあぐらをかいていた俺はゆっくり顔だけ向けた。赤音の目は半分ほど閉じたままで、意識はぼやけているのだろう。肩から垂れ下がったシーツは身体のおやかなラインを明瞭に浮かびあがらせている。寝姿には多少の色気と甘えるような幼さがあつて、不思議な感じがした。変な話だが子供のようでも大人の女のようにも見えるように見えた。

「先輩、^ノについて何かわかった……？」

「明日にしよう」

「あたしも少し気になる」

「総じてつまらない日記だったよ」

「そうなんだ……期待外れだね」

赤音の目は再び閉じられた。先輩——言い得て妙な表現ではある。無人島暮らしを先にしていた先住者の記録が俺の持つ学習ノートに刻まれている。

俺たちと同じように危機に苦しみ、衝突し、和解決し——そして奈落へと転落した。

書き手は独善的で傲慢なところがある中年男だ。彼の目線で残酷な事件はつづられている。ページによっては彼の血液らしき落ちた血痕のシミらしきものもあった。

もう一度、目を通してみるとしよう。あまり気が向かないが。

第一章 潔白日記

何から話せばいいかわからない。記録を残したつて、無駄なのはわかっている。わかっているが無駄なことをするのは馬鹿者のすることだ。

それでも、私が馬鹿になったとしても……いや、たとえ無駄かもしれないなくても、仮に裁判になったとして私が無実だと証明するためにこのノートに一連の出来事の仔細を書き記すことにした。

あくまで未来、今後のためだ。保身ではなく正義のためでもある。

いや、ひたすらに真実のためか。なんでもいい。なんだっていいんだ。ただ、書いておかなければならない。言わば私の義務かもしれない。

かつて仲間であったはずの彼らはおぞましく、私のような高尚な文明人には受け入れがたい存在に変貌したのだ。

最初はそれなりにまともだったくせにいつしか、ペ

ンキが剥がれ落ちるように倫理が抜け落ちていった。

確かに私も彼らに少なからず殺意を持っていたが、極めて理性的に行動した。

潔白なのだ。従わされたこともあったが、抵抗した本当だ。

いや、だめだ……こんな書き方ではいけない。わかりやすく、順を追って書くべきか。

そうだ。まず、私の名前と身分を記そう。

瀬戸正之助せじょうすけだ。江戸時代の武家を思わせる古臭い名前だが、歳はまだ三十八歳だ。

ミクロネシア連邦における大使館の駐在員であり、官職は一等書記官だ。外務省によって派遣された外交官だ。

既婚であり、愛すべき妻に操を立てている。

どうか、そのことを疑わないで欲しい。

思い出せば——最初の始まりはミクロネシア連邦の首都パリキール。

旧日本軍の遺骨を回収すると口では言いながらも観光旅行気分できやがったばんくら間抜けどもを無理や

り顔面に貼りつけた笑顔で歓迎してやって、善意の協力者としてまる一日相手をこなし、ホテルの手配や地元民との交渉を終わらせ、役所への手続きなどでくたくたになっていた頃だ。

自分では何もしない、要求だけは立派な老人の思い出作りのために血税が垂れ流されている事実には憤りを覚えながら、私は酒場でココナツビールをあおつていた。

戦没者遺骸遺物等引渡し協定を結んでいない太平洋諸島では日本人の遺骨は観光の道具にされている。或いは現地人によつて埋葬されている。賄賂を渡して墓荒らしをする汚れ仕事など染しくやれるわけがない。

収集しようとする度に下賤な墓泥棒と罵られるクツツタレな仕事だ。現地法にも倫理観にも反しているから当然の報いといえる。日本の常識は世界の常識ではない。パスポートに記載すべき文言だ。

現地妻とともに埋葬された未帰還日本兵などは戻りたくないからここに居たのだ。

そこをはき違えているボケ老人は真実を見ようとせ

ず、自分の欲望が満たされないとわかると発狂する。更年期障害のおかげで脳内麻薬が炸裂し、制御不能になっている老害の手本みたいな存在たちを相手にしなければならぬ私は介護士の免許でも取りに行くべきだろうか。

頭がずきずきと痛んだ。こめかみをもんだ。単身赴任のストレスのせいか、私は慢性的な偏頭痛を抱えていた。

腎臓近くに小さな腫瘍が発見されたのも笑い話といえる。私の強固で丈夫な体がそれくらいで倒れるわけではない。医者は金儲けのために深刻な顔で錠剤を与えたがり、入院させたがるものだからだ。

酒をあおった。アルコールはわかりやすい救いだった。現実という地獄から酩酊という天国へと連れていってくれる天使の飲み物だ。

そしてこの天国たる小さくうらぶれた酒場は酒と香辛料の臭い、汗っかきの観光客の体臭でくそみたいに淀んでいる。宵の口となった現在、観光客でぎゅうぎゅう詰めになっちまっている。

素晴らしき南の島は人を惹きつける。スカイブルの素晴らしい海と原始人が住むような家屋のおかげだ。電気も水道もろくに通っていない場所でなぜ人間ははしゃぎたがるのだろうか。私は日本に帰ってコンクリートの壁に囲まれた窮屈な部屋でガンガンにエアコンを効かせて環境破壊に貢献したい。それが人間らしい生活だと考えている。

テーブル席を占領した四人の中国人グループががり立てるように我が物顔で北京語をしゃべっていた。声量を抑えるという意識がない。周囲の迷惑を考えない者たちだ。今日は厄日なのかもしれない。

くらくらするほど酔っ払ってきて、悪酔いのためか目がしよぼしよぼしてきた。帰ろうかとグラスを置くと、中国人の怒声がいきなり耳に入った。

彼は席から立ち上がり、若い女に向かって何かまくし立てていた。

二十代前半のセミロングの女は戸惑い、バッグを後ろに隠して両手で護っていた。

反射的な行動だろうが、人によってはひどい侮辱と

受け取る。

女も中国人なら即座にプチ切れて反論するだろうが、残念なことに日本人のようで、言葉が理解できずに目を白黒させながら他人事のように成り行きを見守っていた。

この世界では意思表示をしない文化は嫌われる。黙認や沈黙は美徳とはならない。

女の後ろに大柄の男が一人、庇うように前に出ようか悩んでるようだった。中国人は怒ってはいるのだが、訴えかけるようにしゃべっているせいで危機感を抱けず、遠慮もあつて出遅れたのだろう。

私はもめごとに対して顔をしかめているマスターに遠慮なくビールを注文した。騒動を肴さかなにするのもよかつたが一計講ずることにした。

空になったジョッキにマスターは注つごうとしたので、背後の棚にある別のジョッキを指し示した。

片手に新しいビールを持ってちどりで現場に近づき、中国人に北京語で話しかけると彼はどうやら床に捨てたゴミを拾われたのが気に入らないようだった。

酔つ払つて母国の習慣が出たのだろう。中身をほじくりだしたピーナッツの残骸がテーブルの下に散らばっていた。

日本人の女は上品なくせだったのか、性格的なものか、床のゴミを拾つて片付けようとした。

店員でもないのに恥をかかされたと彼は感じたのだろう。私は『彼女はヒールにピーナッツの残骸がぶつかったから気になって拾つただけだ。悪気はない』と適当に作り話をでっちあげた。酔いのために呂律の回つていない発音で中国語は通じなかつたかもしれない。中国人はしめ面のままだった。なんとでもなれと意味もなく強気になりながらも白い泡の溢れたビールジョッキを中国人に手渡した。

彼は私には理解できない単語、恐らくは皮肉を咬いて席に座つた。

矜持があるのか、私からの酒はむげにされ、断られた。

中国人の仲間も一斉に視線を外した。
私もカウンターに戻り、手渡すはずだったビールを

口にした。味がろくにわからなかつた。ツマミである砂糖漬けの羊肉を齧つた。フルーツの芳醇な香りはあるだろうが、この酒の臭いが沁みこんだ鼻ではもうわからぬ。

ステージで楽団が演奏を始めた。客数がピークを迎えた合図だ。

改造されたヤシの実が球体のついた棒でぶん殴られている。その木琴に似た軽快な民族音楽のせいか、うとうとと眠くなつてきた。

気配を感じて少しだけ横を向いた。助けた女が今更こちらに寄つてきていた。ツレの男との話し合いが終わったらしい。

「すみません。助かりました」

「ガイドをつけるべきだ」

「私がガイドなんです」

完全に振り向かず、若い女に向けて日本語で返すと、彼女ははにかみながら自嘲した。

英語やポリネシア語に属する言語を多少しゃべられても他の言語に関しては専門外なのは仕方ないかもしれぬ

ない。

ガイドにくつついていた大柄な男が進み出てきた。

四角形の顔と筋肉に覆われた立派な体型をしていた。

騒動から逃げていた臆病者の似合わないものだ。

「よかつたら、なんか奢りますよ。てか、日本人ですよね？ 俺もそうなんですよ」

そりゃあ、見ればわかる。

大柄の男は馴れ馴れしい態度で私の横に腰掛けた。

愛想笑いを貼りつけ、グラスを傾けて一人で馬鹿み

たいに自分のことを語り始める。

彼は黒木という名で、職業は雑誌記者だという。オ

カルト系娯楽雑誌の一角を担当していて、今回はムー

大陸やら神話やらの取材に来たらしかった。

この手の人間は図々しく、厚顔でいて恥知らずで私

の好みではなかったが——ガイドの女、立花はよく礼

儀を弁えていて、ひまわりのような笑顔に好印象を持

った。

私も興に乗って取りとめのないことを話し続けた。

どうせ家に帰ってもやることなどなかった。

駐在員は孤独だ。国益のためとはいえ、こんな未開の地で生活するはめになっっている。

私には寂しさもあつたのだろう。だから、黒木の話

に私は乗ってしまった。

この時はスキューバダイビングに行くような気安さ

だった。どうということもなく約束をかわしてしまつ

た。

そして、これが私の一生を狂わせることになった絶

望への片道切符だった。

首都パリキールから旧首都コロニアへ。

パリキールは行政施設があるだけの集落みたいなも

のだが、コロニアは市街地だ。それでもバナナやマン

ゴー、たわわに実るヤシの木がそこらじゅうに生えて

いて、常夏の南国ならではの楽園のごとき雰囲気を漂

わせている。

ボンベイ島を円で囲む国道をジープで走っていると、

斜めに垂れた海岸沿いの街路樹から伸びた小枝がフロ

ロ

ントガラスにぶつかつた。未だにステアリングを握れば火照つて熱い。

季節は初夏だ。脇の草地にはザクロの花が赤く染まつていた。

脇道を通ろうとすれば黄土の未整備な道路に出くわし、たまに穴が空いていたり、水溜りができていたりする。

メインストリート以外はアスファルトが少なく、石畳に頼っている部分もあつた。

コロニアの看板標識を通り過ぎれば、西洋文化圏を象徴するモダンな建物が姿を現し始める。

ベーシックな三角屋根の住宅、トタン造りのあばら家、赤煉瓦造りの古めかしい共同住宅、古い家々も残つていて、それなりに趣おもむきがある。

広がつた森林はいつも通り水草の香気を漂わせている。森の臭気は人の気分をよくさせる。頭の隅でついでに何をやるわけでもなく森林浴をしたいと考えてしまうそんなのんびりとした時間はじじいになつてからでいいと結論が出る。

カーブを曲がつてささやかな大きさのマイクロネシア短期大学を通り過ぎ、エースコマーシャルセンター付近の駐車場にジープを停車した。

向かい側にある長方形の博物館——旧日本軍の残骸が展示させられているジャパニーズタンクスはミリタリーマニアには垂涎物だが、実際に見に来ているのは白人ばかりで日本人は最近は少なくなつてきている。

まあここに来ずとも太平洋の島々では戦車なんてそこら中に転がつているのだが。

マニアというのは出不精だ。こんな遠い異国の地に本物の高射砲や迫撃砲など見に来る人は少ない。

センターで時間調整のための細々とした雑貨類の買い物をしてしていると時刻が来た。待ち合わせ場所である駐車場に集まつていた人間は五人だつた。

ピンクのアロハシャツに褐色の肌の現地人。やや太り気味で愚鈍そうだった。

大柄で雑誌記者の黒木。持つていたバッグも馬鹿でかい。むき出しの筋肉が丸太のようだ。

ガイドの大学生アルバイトの立花。暑さにげんなり



している。線の細さからしてデスクワークばかりしているタイプだ。

オーバーオールのスーツ刈りの少年。ヤンキースの野球帽を被っている。顔立ちはこの場の誰にも似ていない。

オールドミスの神経質そうな女。金に近い派手な染め髪だ。普段ならこの手合いには近づかない。

ひりつく太陽の熱波がアスファルトから陽炎を立ち昇らせている。照り返しに苦しみながらもまぶたを伏せながら近寄って声をかけた。

自己紹介をかわすと少年が新しいガイドだという。目的地の地形に詳しいらしい。

立花は見た目麗しいが、世間知らずっぽいので仕方ないだろう。

オールドミスは本当か嘘かわからないが考古学者だという。私と同じ歳ほどの女性だ。美人ではないがほつそりとして、眼鏡の奥は鋭い。人を寄せつけない刺々しい雰囲気身をまとったまま挨拶もそこそこに沈黙している。

現地人はロドリードと名乗り、流暢な英語とキーの高い日本語を話した。

大日本帝国が統治していた頃、祖父の日本語教育の名残りが孫である彼に残ったというよくある話だ。生業の観光業のために勉強したということでもある。

ロドリードは操縦士だという。

いまいち実感が湧かなかつたが本当に北東に五百キロ離れた孤島に行くらしい。ならば、マーシャル諸島に近くなるし、コスラエ州にあたるのではないだろうか。

目的地は黒潮——赤道海流を逆流するわけであり、セスナ機で行くのは悪くないアイデアであるが、ありもしないムー大陸の痕跡など探さなくてもこのポンペイには数多くの歴史的遺跡があるわけなのだが。

「ウーモ・オンブレって伝説の雪男がいるらしいんですよ」

それは煙男スモークマンという意味だ。

黒木の間違いを訂正する気にもならず、頷いた。

一行は山中にあるセスナ機のもとへ向かった。乗せ

られたロドリードの乗用車はボルボ、こんなところまで中華マネーに染められていて苦笑が漏れる。

私はここで違和感を覚えていたのだが、無料で離島見学に連れていってもらえる立場だったので、何も言わずに同行してしまった。

気づけばよかったのだ。

ポンペイ空港の正式な滑走路を使わず、荒れた山道を使って加速し、飛び立つセスナ機の胡散臭さを……。

孤島の名前は発音しにくい名前だった。

遠い過去に居たポナペ人の大酋長が名付けた。英名では……忘れてしまった。ミーカナとか、レエタオとか、レウルとか、王朝時代の王族をもじったような不可思議な名前だった。

島には浅瀬が少なく、海溝に引つかかっているせいか潮目が荒く、多くの渦潮が島を護るように偏在していた。

土地面積があるので政府は開発しようとしたらしい

が、航路から外れているし、物資や予算の関係で余裕がないのが現状だ。

そもそも休火山があつて地層が不安定なのも影響しているのだろう。

せめて原住民が住み着いていればよかつたのだろうが、移住を希望する者はおらず、悪魔が住み着いているとも噂されていた。

ギリギリ六人乗り込めたスクラップ寸前の飛行機は荒い気流でガタガタと揺れた。外板のつなぎ目が錆で腐食していたのが不安を呼び、私は手すりにしがみついていた。

吐き戻ししそうになつた時点で家に帰りたくなつてきていた。プロペラの回転音もうるさく、耳障りで鼓膜を刺激してやまない。

合成皮で作られた緑色のシートも硬かつた。二時間近い拷問の末に現地に降り立つた時は尻骨が砕けていると思つたくらいだ。

着陸する時も最悪だった。いや、もう言うまい。大地を踏みしめることができただけでも感謝せねば。

でこぼこの滑走路に飛行機は不恰好に降り立つと、機内は上下に激しく揺れた。ロドリードを除く全員は生きた心地はしなかった。誰もが蒼白になっている。森を切り開いただけの空地には木造の粗末な小屋が三つ建っていて、黄色に褪色した土壁は破れて中身の竹芯が露出してしまっている。

三角や丸型の藁葺き屋根の一部は損傷が目立つ。あそこを拠点にするにしても野ざらしとそう変わらない。

「一流のホテルが発見できたな」と私は小声で呟いた。

鉄条網に掲げられた建築会社の看板はずり落ちて地面に転がっていた。開発中止か、休止かはわからないが人気はない。現場は施行途中で投げ出されたようだ。一泊二日ということ念のため寝袋を持ってきたが、ホラー事件でも起きそうな荒涼とした風情だ。

ヤンキースの野球帽を被った少年は私たちの前に出て、観光場所を案内すると言った。

日本語は流暢だ。顔立ちも日本人に近く愛嬌があつて人懐っこい笑顔を見せ、かわいらしい。しかし、栄養不足なのか腕や足が細いのが気の毒だった。

小休憩と移動を繰り返しながら一同は進んだ。鬱蒼する熱帯雨林の中を歩く途中、この勤労少年にナッツチョコレートを渡した。少年は驚いたが、嬉しそうに受け取った。

その眩しい笑顔を見て、秀樹のことを思い出した。

私の息子は十二歳になったがろくに会っていない。この少年のように素直に育っていることを祈るばかりだ。

観光気分の黒木と立花は写真を取ったり、物珍しそうに白い花卉の奥に赤い斑点があるアオイ——ハイビスカスを指で突いている。オールドミスは何が気に食わないのか爪を噛んでいて、ロドリードはくまなく周辺に視線を向けていた。

少年と世間話の話題は自然と家族のことになった。

彼とロドリードは家族関係や親戚かと思つたが、まったく他人とのことで——父親を亡くして勤労しなければならぬ身上とのことだ。

目頭が少し熱くなった。私は歳のせいで涙もろくなっている。

少年は拳動不審なロドリードに言及した。彼は精霊を恐れていると声を潜めていった。気になったので詳しく説明を求めた。

この島に居る煙男スモークマンは人を嫌う。人の罪業を嫌う。人の醜悪さを嫌う。

だからそれに背いているロドリードは精霊の怒りを買うと考えている、との話だ。

日本では子供を非行に走らせないために鬼という存在があげられる。

夜中に出歩くな、親から離れるな、盗みをするな、そんなことをすれば鬼に食べられるぞ。といった具合だ。

原始生活を楽しむ連中は信心深い。草木や巨石に向かつて両手を組み合わせて祈り、香木を焚く。シワだらけの老婆が死んだ赤子のために祈る姿はある種の敬虔けいけんさすら感じさせられた。

この時、私にはロドリードがどんなマナー違反をしたのかわからなかった。わかったところでもう遅かっただろうが。

山登りは数時間ほどで終わった。足首が痛んだ。疲労がまとわりついて身体を重くさせる。

地層は変化して足場は小石だらけになって高木が消えた。見渡す景色が広がり、森林限界となった。

高地から見える島の大自然は美しい。

野生を物語る生物たちと人の手で乱れていない深緑は前人未踏の秘境を感じさせる。

足腰には厳しい道なき道を進んでいくと、人の手によつて玄武岩げんぶがんと苦灰岩くかいがんが積み重ねられた遺跡に出くわした。巨石を積みあげただけの代物であり、不均等な石塔となっている。ストーンサークルとまではいかないが人為的に造られたものには違いない。

石壁にぼつぼつと描かれている壁画を全員で観察する。色は少なく、削られてきただけの線画だ。

少年が過去に存在したらしい部族の説明をし、オルドミスが何点か質問し、壁画をそつと柔らかく撫でた。

壁画は鹿や鳥の輪郭が描かれている。狩りの成功と供養の意味合いで描かれているらしい。

紀元前に居た原始人が何を思っていたか私は興味はない。古いだけの落書きが意味を持ち、価値のあるものになっているのはわかるが。

目的地だったのか、大型公園のような高原に辿り着いた。山と山の間に存在し、全体が丸くへこんでいて巨大なボウルのようになっていた。

雨水が溜まるのか沼沢地しやうたくちになつており、泥水のおかげで靴が沈む。

眼下には——この釜戸の底を絨毯を広げるように飾っている水草の花が咲き乱れていた。

フキの花だ。キャベツが開いたような複葉、その中心には搾りたての牛乳を思わせる質感のある花が一輪、凛として咲いている。

その上を多くの青い蝶がひらひらと優雅に飛んでいて、白い斑点が美しい。金属か宝石のごとくきらめいている。

間近で見ようとして、少年にシャツの裾を引っ張られた。

「あの蝶は人間の扉を開きます」

少年は神妙な顔で忠告した。

鱗粉りんぷんに毒性でもあるのかもしれない。

或いは翅しが毒毛か。そもそも外敵に捕まった時に役立つのが鱗粉だと聞く。従うことにした。

高原の東側、なるべく土の乾いたところを歩きながら移動すると、ぽつかりと口を開いた洞窟が私たちを待ち構えていた。上部から垂れ下がった蔓草が入り口を覆うように隠していて、内部の光のあたる場所は緑苔が繁茂している。

ロドリードは出入り口で待っていると云った。

彼は終始びくびくしていて、周りを見回していた。どこかにいる何かを恐れているようだった。

少年は松明を持って先導した。暗闇に光を投げかけながら油断なく左右に視線を飛ばしていた。

彼は肝が据わっている。私たちと違ってコウモリが飛び交ってもまるで動揺しない。

中は鍾乳洞だった。皮膚に絡みつく冷氣には水気がたっぷり含まれ、水滴の音がところどころからした。襟元を正して、汗で胸板にくっついたワイシャツを引

き剥^はがした。

地面から生えた檜のような先細い岩に注意するように忠告された。気をつけなければ致命傷を負うとのことだ。血が凍りつくような助言だ。

壁沿いの雨水で浸食された岩肌は土質が影響しているのか青と黄が混ざったマーブル模様で——不気味でおどろおどろしく、約百メートルほど歩いただけで奥部についた。

大きな祭壇がそこにはあった。

そこだけトンネルのように丸くくり貫かれた歩廊が五メートルほど造られている。天井は高くなり空間は広くなった。採光窓はないが左右の壁にはかつて油を通した道なのだろう、細長いくぼみがあった。その傍に飾り柱がそびえ、中央部の床面には自然動物たちが行進する様相が刻まれていた。

奥に鎮座している石棺の基板には不可思議な象形文字が羅列されている。ふたがずれていて中身が見えたが、そこには何もなかった。

どこか神殿、または靈廟^{れいびやう}と錯覚させる荘嚴な趣を醸

し出している。

祭壇の背にある乾いて平らな壁画には人間が描かれているが、その身体は線だけだ。潰れた三角が横に並んだ地面の上にあぐらをかいて座っているだけだ。

両手が斜めに伸び——微かに手の中が開かれて差し指を作り——ヒビが入り、崩壊していく大地の絵を示している。

どこか禪^{ぜん}のように意味ありげで、インパクトがあった。瞠目^{どうめく}した。

「凄いな」

黒木も感銘を受けたのか、写真をパシャパシャと撮っていた。その真横の立花は薄気味悪そうな顔で身を退いている。

なぜだかオールドミスは悪態をつき、横壁にあった石を蹴り飛ばしていた。

「スペイン人め！」

呪いの言葉が吐かれ、蹴り飛ばされる軽石は崩れて砂になった。楯田のそれはヘルメットだったものだと少年が教えてくれた。

マスクット銃の残骸や錆び朽ちた槍の穂先もあり、それはかつて訪れた篡奪者の残したものだとの説明だ。ミクロネシアも含む——太平洋の島々の歴史はほの暗い。

スペイン、ドイツ、日本、アメリカ。統治され、統帥された。

今の自治権だつて問題が起これば取りあげられることもありえる。自力で安全保障などできないからだ。太平洋の多くの島々の管轄権は今でもアングロサクソンのものだ。経済で国を支配する新植民地主義は現代でも病魔のごとく蔓延している。

オールドミスの説明だが、ここにあつた財宝や遺物はスペイン人が持ち去り、代わりに持てなくなった重いヘルメットや武器を置いていったとのことだった。

なるほど、両手が財宝でいっぱいになれば何かを捨てなければならぬだろう。

どんなものがあつたのか少年に聞くと、恐らくは淡紅銀や蒼玉や水晶等の民族工芸品らしい。あくまで想像だと注釈されたが。

撮影と見学の時間は非常に長かった。

黒木によれば煙男は大発見で、オールドミスによれば歴史的遺産だそうだ。

私的には交通的に不便なこの土地では観光資源にもならないし、珍しいことは珍しいがこのような壁画などどこにでもあると思つた。

私は疲労を癒すために岩石に腰掛けた。

興奮する二人を尻目に立花は少年と何かを話していた。内容はアニメだ。

対照的だつたのは少年は興味はなさそうで、立花は少年を前にはしゃいでいて、どうも立場が逆だつた。

「あのさ、アニメ映画つて好き？ アニメとか見る？ 私結構そういうの好きなんだ」

「いいですね」

「面白いよね？ ね？ 私も好きなんだ」

「面白いです」

受け答えをする少年は真つ直ぐな対応だ。

二時間ほどで座談会が終わつて入り口に戻ると、ロドリードは退屈そうに煙草をふかしていた。いや、ハ

ッシッシだ。

こいつに明日、飛行機を操縦されるかと思うとほどよい絶望感が襲ってくる。

空のオレンジ色は黒く染まっていき、夜が薄っすらと姿を見せ始めた。

洞窟近くの平らな場所でのキャンプ、丁度よく岩清水があつたので手洗いは楽だつた。

夕食の携帯食料は軍糧だつた。黒木がふざけて持ってきたらしいのだが、イタリア製のおかけかフリーズドライ製法のシチューが食べられた。

オールドミスはいびきさえなければ星空の中でよく眠れただろう。

誰も指摘できなかつたのが悲しいところだ。

早朝。

日本なら解体途中だと判断されるだろう小型機専用滑走路に戻り、ロドリードが飛行機のエンジンをかけようとするコクピットの計器類が誰でもひと目でわ

かる異常値を弾き出した。

電気配線がバチバチとスパークする炸裂音——背筋のゾツとするような轟音——それと何かが激しく空転する音。

乗り込んでいた我々は何事かと操縦席を見た。

動かない石像の真似をしているロドリードの姿がそこにあり、彼は三秒後に動くことを思い出し、緩慢な動作で額を手で押さえていた。

故障だ。

ひとまず、全員が機内から降りた。ロドリードは故障を直すといって工具類を手に持ち、格闘し始めた。

手持ちぶさたになつた我々は近くの小川に案内され、水浴びをすることにした。最初は女性陣が水を浴びるそれを背にして番犬のように少年が座っていた。どうも命令されたらしかつた。

私たちの順番になると黒木の粘っこい視線が水浴びをしたばかりで、濡れた髪をタオルでふいている立花に向いていることに気づいた。

黒木は立花のことが好きなのか、或いは性欲を持つ

ている。

オールドミスとの三人で来なければ恋人同士として来たかもしれない。

いや、立花との間にそんな情愛に満ちた空気はない。彼の一方通行かもしれない。

ゆったりとした時間が流れる。ぼんやりしている内に昼になった。

木陰で青空を眺めていた私に少年が悲しそうな顔を見せて、耳打ちした。

「飛行機は直らないかもしれない。島民のよしみで黙っていたけど、彼は正式な操縦士じゃないんだ。できることはハッシッシを吸って現実逃避するだけだ」

ぎよっとして少年を見ると、彼はアラと名乗った。

自分は日本人とのハーフであり、天地神明に誓ってこれが真実だと告げた。

少年は私の目を見て、首を横に振り、胸の裡こゝろを明かしたことで満足したのか、腕組みをしてべたんと座り込んだ。

即座に私は飛行機に疾走した。

ロドリードは座席にもたれてハッシッシを吸いながら陶酔していた。

彼は私に気づくと身を乗り出し、休憩していたと抗弁した。どうでもよかった。

ドライバーで開かれた基盤を見、メーターやレバーの裏側を覗いた。

制御基盤の配線は魚の骨のように整然としながらも絡み合っている。一瞬で配線のショートの原因がわかった。

なんてこった。これは、そんな、まさか、冗談だろう？

「クソッ……過電流でショートしてやがる」

本格的に頭を突っ込み、座席をずらし、携帯ライトで内部を照らすと素人目でも故障の原因がわかった。

人為的な配線組みかえだ。

エンジン出力は最大限になっており、高圧コンプレッサーの安全弁は蓋がされている。電流遮断器の集積回路はスプーンですくったようにえぐられ、機能不全となっている。

不自然にくぐられ、一束となつて絡まり、被膜が剥がれ銅線を引き出された高圧コードの先、イグニッション・コイルが油脂で湿っていた。

鼻につくすえた匂い。恐らくエンジンオイルが抜き取られて浸されている。

コードの接合部が焦げ目のある茶褐色になり、ボトル型の胴体には亀裂が入つてこんがり焼けてしまつている。

ご丁寧にもスクリーシャフトの裏側にある圧縮機にも異物が突つ込まれている。それはどこから取つた大小のボルト。

或いはジェットエンジンが調子よく回転し、見事に爆散しなかつただけよかつたが——この仕掛けには粘着質な陰湿ささえ漂っている。

結論から言えばこれは時限爆弾だ——エンジンをかけようとしたらすべてが吹き飛ぶように改造されていた。

笑いそうになつた。笑えなかつた。

脱力し、ぐつたりとシートにもたれかかつて、コク

ピットガラスの向こうを呆然と見つめた。

ロドリードが横から「直せるのか？」と問うた。

答える気力などあるわけがない。

私の中では警鐘が鳴り響いていた。

修繕は不可能だ。素人に飛行機のジェットエンジンが直せたら苦勞はしない。そもそも代替部品もないのが絶望だ。

しかし、無線機やナプスター^{ナプスター}差異修正^{差異修正}全地球位置^{全地球位置}把握システムに電気配線を繋げれば希望はある。

そう思つて幾つかの装置の回路を観察し、検討した。無線機は——誘導コイルが切り取られ、分波器にはヒビが入り、アンプが引つこ抜かれて消失していた。

丁寧な破壊ぶりには舌を巻く。

幸い、極小だったせいかな発信機は無事だった。平面のクレジットカードのようなもの。瞬間的には歓喜した。

すぐに思い直した。

我々は携帯電話を持つているのだから、これは無用に近い。

電力を保存しなければならぬと理解した。全員を集め、事態を告げた。

誰もが携帯電話の電源ボタンを切った。そして円を作つて話し合いがスタートした。

「ミクロネシア観光局に飛行許可書並びに航法予定書を提出したはずだ。数日か、一週間の間に沿岸警備隊によつて助けはくる。問題はないだろう」

私の言葉は自分自身に言い聞かすためのものだった。

黒木はうつむき気味で青ざめて下唇を噛んでいた。

ロドリードは気まずそうに目を逸らしていた。

立花は暗い顔だった。

オールドミスは目に険を含ませてロドリードを睨んでいた。

「誰がやった？」

黒木が低い声で周囲を見回した。

この島に足止めして、喜ぶ人間などこの場にはないように思える。メリットなどない。

全員が黙つてお互いの顔色を探っている。空気に猜疑心が混ざっている。

「我々の出立時か、夜のうちにどこかにいる島の住人がやったんじゃないのか。空白の時間がありすぎる。見張りをつければよかった」

「どうしてそんなことを？」

私が犯行時刻を告げ、立花が疑問を宙に浮かべた。

話し合ったが、解決の糸口にはならず、わからないことだらけだ。

「ちよつと。誰かき、飛行機を直せないの？ 本当になんとかならないの？ 私は一刻も早く帰りたいのよ」

「私も最善を尽くしたが……できると思うなら、君もやつてみればいい」

「言い方に気をつけてよ。偉そうに。何様のつもり？」

オールドミスはヒステリーを起こしかけている。

弱々しそうな誰かを責めることで自身の安定を得ようとする。実に性根が腐った女だ。

私はグツと堪えて、黙りこくつた。

オールドミスは無能者を見るような軽蔑の視線をぶつけてきて、ツカツカと足音を立てて飛行機に向かっ

た。

三流大学の准教授様であろうと材料もなしに回路を組みかえ、直せるはずがない。

持ってきた食料を大切に食べよう、誰かが提案した。誰かは忘れた。

夜が来て、お互いの住居エリアが決まる。

三つの小屋は等分され、一つは男性の物。一つは女性の物。一つは共有の物置場。

シートと多段ベッドがあつたのが救いだ。建築作業員用だつたのだろう。

この時の私は楽観的だつた。救助が遠からず訪れると思つていた。

雲行きが怪しくなってきたのは次の日、三日目の昼だつた。

そろそろ果物の採取や獣の狩猟をやらなければならぬ段階だつた。手持ちの食糧にそれほどの余分がないせいだ。

昼飯時に全員の前にして、耐えきれなくなったのか

——黒木がある事情を告白した。

取材費を浮かすためにもぐりの操縦士を雇つた、と。それはロドリドで、ポンペイ空港の滑走路を使わず、役所に書類を提出しなかつたのは手数料を取られるのが嫌だつたと。

つまり、我々は誰にも知られずにこの場所に飛び立つたことになる。これがケチの代償だ。私は黒木を強く呪つたが、オールドミスは激昂し、素早い行動に出た。

手近にあつた木板で思い切り黒木の頭を殴りつけたのだ。

黒木も黙つていながつた。オールドミスにタックルし、吹き飛ばした。

彼は大学生時代はラグビー部で、女に舐められて大人しくしているような性格ではなかつた。

不謹慎だが、私は胸がすくのを感じた。紳士でいるよりも悪漢でいる方が賢明な生き方かもしれないと思つた。

空気が凍っている時——ロドリードもまた残酷な事実を告白した。

あの飛行機は自分のものではなく、知り合いから無断で借りたものだ。

これは彼が操縦士としての能力は低く、トラブルに対処する力などないという証明だ。

「……どうなるんですか、私たち？」

立花が嘆くように呟いた。

私はこの淀みきつた空気を壊したくて口を開く。

「私は大使館職員だ。つまり、名士だ。日本政府からミクロネシア政府に要請が行き、沿岸警備隊が通常よりも長い時間で搜索活動を行うはずだ。彼の国とは齟齬もあるが友好関係は上々だ。日系大統領も存在していた。同盟国であるアメリカ軍も力になってくれるかもしれない」

この慰めは幾分か希望になったようで、全員は納得しないまでも落ち着きを取り戻した。

携帯の電源を昼の十二時から一時までつけ、消す。

なんらかのシグナルになると思ってたからだ。希望は

捨ててはいけない。

スコールが降ってくる。気温が一気に下降する。冷雨が家屋まで入ってくる。明日には屋根を修復しよう。そうして、三日目が終わる。

時間が流れていく。一週間目となった。

水洗いのせいかシャツの首元のシミが黒くなり、手先が荒れ、足裏に水疱ができ、虫に刺され皮膚は腫れ、空腹で飢餓を呼ぶ。

衣服と日用雑貨を詰め込んだポストンバッグを持ってきた他の者と違い、私はほとんど着の身着のまま来てしまったこともある。清潔な衣服が欲しかったが、黒木の服はだぼだぼで、過分にある女性陣の服はきつすぎる。

川魚や果物を採って食べていくのは思った以上にストレスがかかる。香辛料や調味料に舌が慣れすぎていく。

満たされぬ欲求が頭痛を呼ぶ。酒をかつ食らって眠

りたい。戦時中のようにコンパスに充填されているアルコールを飲んでしまおうかとも考えたが、この馬鹿げたアイディアはすぐに打ち消した。

我々遭難者の中で一番元気のいい勤労少年は食料の調達では頭角を現している。

キヤッサバと鯰なまこをバナナの大葉で包み、二つを土に埋めてその上で火を焚き——蒸して昼飯の食卓を彩った。

彼は女性陣の小屋を寢床としていて、哀れなことに女性服を着せられていた。

少年の赤いワンピース姿はシニールだったが、美少年で線が細く華奢なせいか不思議と似合っていた。本人は毛ほども気にしていない。替えの服があるだけありがたい、とのことだ。

キヤッサバの根茎からタビオカを作り、皆には明日には米のようにして食べさせてくれると陽気に言った。

擬似的なものだが、助かる話である。

疲れた顔で各自、フォークを動かしていると——この島には船舶を係留するための埠頭かどがあると少年は告

げた。

「どうしてもっと早く教えてくれなかったんだ」

「道が険しく。切り立った崖も通る。僕と何人かで行くべきです」

それはつまり、道中が危険だということだ。

質問した黒木は口をもごもごとさせていた。危険は誰だって嫌だ。

くじ引きで決めることにした。色つきの棒を引き当てるて向かうことになったのは私と立花。申しわけないが、少年も案内に必要だった。

昼飯が終わり、一時間経った後に出発。

鬱蒼とした藪やぶの中を強引に進む。柔らかくのけやすい植物をかき分ける。踏みしめるのは芽吹く青々とした糸杉、へこんだくぼみに整列している縁石は人為的に配置されたものだろう。それは道幅を示している。かつては山道であった名残りかもしれない。

熱帯雨林では人が通らず、半年も経てば道は草で覆われて道でなくなる。

「アラちゃんのお父さんとお母さん心配してるよね？」

大丈夫？」

「半年前に父さんは死にました。母さんはどこにいるかわかりません」

「ごめん」

返答に立花は萎縮した。

少年は淡々としていて、少しも痛痒は感じていないように見えた。

それでも立花へのフォローのためかもう一言あった。

「だから僕は自立し、懸命に働かねばなりません」

「十五なのにしっかりとしてるね。ていうか、私も雇われなんだけどね……あー、こんな仕事請けるんじゃないか。黒木さん気持ち悪いし、枝野教授えだのの頼みなんかわけばよかつたなあー」

立花は髪を摘んで、無造作に髪先のキューティクルを確かめる。

嫌がっていたが、彼女が黒木に口説かれているシーンはよく見かける。

強引ではなかったが、このところ食い下がるようになってる。

治安機構がないこんな島では誰もがいつ暴漢と化すかわからない。ましてや、どこかに得ても知れない民族がいるかもしれないのだ。

枝野——オールドミスと立花はなんらかの関係があるようで、教授と教え子なのかもしれない。

十五分ほど歩いたか、不意に少年は足を止めた。

視線を追うと崖というよりも、幅四メートルほどの谷底がそこにあつた。

著しく傾斜のある細かな段丘、壁沿いにある一段目の小道を通るようだ。二段目に落ちたら骨折は免れないほど距離がある。

四段目から先は見えず、底には太陽が届いていない。転落防止用のロープが金具によつて留められているが弛緩してる箇所もある。うっかり足を踏み外したり、ロープを過信すれば転がり落ちて奈落行きだ。

「ひいひい。アラちゃん。手を握つていい？」

「嫌です」

「私も嫌だ」

中腰になって腰が引けている立花は置いていくこと

にした。

私も当然、恐怖していたが——どういうわけか、私は少年の父親のような気分になっていた。不思議と保護しなければならぬという意識が働いている。

大人として、なるべく醜態を見せたくないという見栄もある。

ついていき、埠頭に辿り着いた時には息も絶え絶えだった。

その場所はおつおつとした岩礁地帯であり、強風のせいが高波が押し寄せていた。

棧橋せんきょうは見る影もなく破壊されている。木材を巨人が粉々にして放り投げたらこんな惨状になるだろう。

岩盤を固定する打ちつばなしのコンクリートは十平方メートルくらいはあるが波でやられて崩れかけている。

申しわけ程度にコンクリートから生えた係留柱には千切れたロープがあった。海面に漂って途中で海底へと消えている。

「定期便は？」

「ありません」

「巡回船は？」

「ないと思います」

「我々はこのから船を作つて脱出すべきかな？ 君はどう思う？」

「僕はこの島にいる精霊が恐ろしいです。皆、息を潜めて静かに生活すればいいと思います。でも、大人たちにはそういうことが難しいということもわかっています」

少年は波打ち際の白い泡を見ながら顔を曇らせていた。

ひよつとするとだが、彼はこれから起こる我々の狂態を——漠然とだが、肌身で感じていたのかもしれない。

今となつては、すべては闇の中だが。

十日目の夜。

尿意をもよおし、トイレに行こうと川の方に向かう

尿意をもよおし、

トイレに行こうと川の方に向かう

た時だった。

闇夜を切り裂く嬌声がどこから聞こえた。

木立の隙間をのぞくと枝野と黒木が交接していた。

枝野は情婦のように尻を突き出し、樹木にもたれかかっており、黒木は後ろから肉棒を挿しこんでいた。

黒木はがっちり枝野の腰を両手でつかみ、獣のような唸り声をあげ、その尻を執拗に股間で叩き続けている。

白い湯気が見えそうなほど荒い呼吸が交差し、快樂のあえぎ声が混じる。

暗がりの中で見えた黒木の目は血走っていて、好きな女を抱くというよりも、欲望を排泄するだけの顔のように見えた。

一方、枝野はポニーの横髪を顔に貼りつけ、半開きの口からだらしなくよだれを垂らし、精一杯男を悦ばせようと左右に尻を振っていた。

膣口から放そうとせず、深く啞えこむために足首をびんと伸ばしたり、ひねったりもする。

二人は喧嘩腰で話しているのをよく見たが融和した

らしく——危機意識もあつてか、男女の情も多少は重なつたようだった。

葉陰にロドリードが隠れているのが見えた。

彼は振り向き、私に気づくとぎよつとしたが、得心したように——にたりとした。

四十近い女と二十代後半の男のセックスはちぐはぐだったが、見ている分には情欲をかき立てる。

私は悶々としながら夜を過ごした。

十三日目の朝。

この朝のことは正直に言えば書きたくない。

罪の意識にさいなまれ、苦しむからだ。今も頭部をカナヅチでノックされてるような頭痛がしている。

いや……真実のために書くことにする。

一つの事件が起きた——立花がロドリードに強姦されたのだ。

彼女は朝起きるなりぐったりと脱力していたが、花火が着火したように突如、半狂乱になってロドリード

を罵倒した。

憎しみを込めて指差し、大音量で叫んでいた。

事情を理解した黒木が激怒してロドリードに詰め寄り、襟首をつかんで小屋の壁まで勢いよく引つ張って押しつけた。

「てめえっ！ 自分が何をやったかわかってんだろっ！ なっ！」

「私はそんなことやっていないっ！ その女の頭がおかしいだけだっ！」

立花は鼻声で目隠しをされ、口に布を突っ込まれ、イントネーションのおかしい日本語とくせのあるポリネシア語——ロドリードの声を聞いたと言う。

用を足している最中に押し倒され、刃物らしきもので脅された。

顔は見れなかったが、ロドリード以外にはありえないとのことだ。

実際、少年では立花を封じ込める力はない。黒木はポリネシア語を話せない。私も身に覚えがない。

つまり、どこかに隠れている島の住人以外ではこの

場ではロドリード以外ありえないのだ。

「……ピンクのアロハシャツが見えました」

これが決定打だった。

見苦しい弁明を続けるロドリードの顔を黒木が殴打した。

倒れたところで馬乗りになって殴り続ける。容赦なくロドリードの顔を変形させようとしている。鼻血が噴き出し、顔中が真っ赤に染まっていく。

しばらくの間は黒木の嫉妬心が暴力となつて変換されていたが、その動きはパァンという乾いた音でストップした。

「ああ、えっ……うっ、嘘……：だろ？」

驚愕で満ちた眩きを漏らした黒木はよろけ、どさりとあっけなく倒れた。

硝煙が噴き出した拳銃をロドリードが持っていた。

銃口から発射された弾は黒木の右太ももを穿ち、貫いたのだ。どくどくとどす黒い鮮血が芝に広がっていく。

「ふざけやがって……お前、こっちに来い」

ロドリードは血だらけの腫れぼったい顔を犬のよう
にぶると振り、立花の腕をつかんだ。

抵抗する彼女の顔を容赦なく銃尻でぶん殴った。立
花は昏倒しかけていた。

小屋に引きずりこもうとしていた。黒木が制止しよ
うとロドリードの足元に食いついたが、傷口を蹴られ、
悶絶して転がった。

「ちよつと、男でしょ！ 助けなさいよ！」

枝野が私に向かって叫んだ。

私は身動きできなかつた。人を撃つなんて、映画の
中だけだと思っていた。

辺りに立ち込め始めた血の臭いが全身麻酔のように
機能したのだ。

小屋から衣服が破れる音がした。怒りと悲しみが混
ざった立花の悲鳴がした。激痛に苦しむ黒木の泣き声
がした。乱暴に尻肉を打つ音がした。助けを求める声
が鼓膜に届いていた。

私は何もできず、ただ立っていた。

十四日目の朝。

ロドリードは王様のように振る舞っていた。

権威の象徴のように銃を見せびらかし、小屋に立花
と枝野を放り込み、脅し、殴りつけ、存分に犯してい
た。

口元は終始緩んでいて、血走った目つきは常軌を逸
していた。甲高い声で私に食料を集めるように命令し
た。

私は従うことしかなかった。無気力だった。あ
んなひどい真似が人間にできるとは考えていなかった。
邪悪な力で豹変^{ひょうへん}してしまつたかのようだった。

密林を歩きながらフルーツを集めていると、うさぎ
を片手に持つた少年に出くわした。

彼は少年特有の強がりなのか単独行動を好むため、
食事時や暇つぶしのオリエンテーション以外では減多
に会わない。

そもそも彼は最初、女性陣とともに寝ていたが枝野
のいびきに耐えきれずに飛行機の機内で過ごしている。

鋼鉄に包まれた機内は防水性は認めるが、太陽にあぶられて蒸し暑いので誰も寝たがらない場所だ。

ひとまず、事情を話すと少年は厳しい顔つきに変化した。

「どうします？」

「わからない……助けさえ、くればいいんだが」

「誰も助けてくれなければ？」

「……私も、死にたくはないんだ。銃で撃たれたら、きつとこの島では助からない」

「立花さんは僕が助けます」

「よせ、やめるんだ！ 大人しくしていればいい。君は隠れてるんだ……いいかね？ 自分のことだけを考えるんだ」

慌てて細い両肩をつかんで制止した。

私は少年にまでひどい目に遭って欲しくなかった。

頭の中で息子の——秀樹ひょうじゅの顔がちらついていた。

立花には気の毒だが、これ以上の犠牲は出て欲しくなかった。

彼女らは性交をしいられているだけで命の危険はま

だない。救助隊さえ来れば大丈夫なんだ、と説得した。「少し待っていてください」

少年は表情を変えずにそれだけ言い残すと、森の中を歩いていった。

私は膝を折り曲げてふくらはぎを地面につけ、へたりこんで目を閉じた。周囲の鳥の声やたらうるさく聞こえていた。

渦を巻く思考——自己弁護の嵐だった。

なぜ、出会って二週間ばかりの人間のために銃を持った暴漢と戦わなければならぬ？

か弱い女性だからか？ 男性はすべからく女性のために命をかけなければならぬのか？

私はお世辞にも色男ではなく——鼻は潰れ、唇は分厚く、目の形も悪い。

結婚できたのだから見合い結婚だった。

中年太りのみつともないビール腹だし、頭髮もはげかけている。悲しいほど短足でもある。

命をかけても絶対にロマンスなど始まらない。

どうせ、なぜ即座に助けなかったのかと弾劾だんがくされる

だけだ。

利己意識だと笑うが笑え。

一つしかない命が惜しいのだ。注射針で刺されるような苦しい痛みは恐ろしいのだ。自分の血を見るのが怖いのだ。

犬死だとわかっていて栄光なき戦いなどしたくないのだ……。

「お待たせしました」

時間にしてどのくらい悩んでいたか忘れたが、少年がマンゴーを一つ、ぼーん、ぼーんと中空に放り投げながら戻ってきた。

オーバーオールポケットから彼岸花ひがんばなが顔を出していた。赤い太陽のように放射線状に咲く花は色鮮やかだ。

少年は彼岸花を握り潰し、その汁をマンゴーに塗りたくった。

私はぼんやりとその様子を眺めていたが——意図を察して麻酔から醒めた患者のように目を開いた。

汁の成分はアルカロイド——土壤動物すら逃げ出す

毒だ。

地盤沈下の回避のために日本中の丘に植えられている毒草でもあった。

「僕らはこれを矢につけ、動物を射るために使っていました。ロドリードさんは動物に成り下がりました」

「殺すのか？」

「殺すほどの毒にはなりません。罰を与えるのです。僕の曾祖父は日本の男は死を恐れない勇猛果敢な戦士だと言っていました。瀬戸さんは戦士ではないのですか？」

「私は昔から、喧嘩や暴力沙汰は嫌いなんだ。スポーツも満足にできず運動音痴なんだ。この太った腹を見ればわかるだろう」

「僕は力なく同じ歳の子供よりも小さいです。ずっとそのことで馬鹿にされます。でも、心は戦士なのです。瀬戸さんも心だけは戦士であるべきなのです」

少年は私にマンゴーを突き出した。
怖々と手を伸ばし、受け取った。

べたべたの汁が手の中にしたたがったが、黄色の皮は

乾き始めていた。

「こういうのです。うさぎを獲りました。鍋を作る間、このマンガーを食べて待つていてください、と」

少年は内緒話をするように顔を近づけ、人指し指を立てた。

瞳は純粹で、されども力強い意志の力があつた。

私にはないものであり、宝石に見劣りしないほど美しかった。

夕方のことだつた。

昼飯を頼んだつもりで痺れを切らしているだろうロドリードの小屋に向かい、ノックした後にはドアを開けた。

中の様子を見ようと思つていたが出会い頭に鼻面を拳で殴打された。いきなりの仕打ちに驚いてのけ反つた。

心の底から蔑んだ顔で私を見るとロドリードはうすのろ、と吐き捨ててきた。怯えた演技をしなくても私

の喉はひきつり悲鳴が漏れた。

私の手の中のマンガーを見つけ、乱暴にひつたくられる。

もう一つの手にあるうさぎの死体を見てロドリードは鷹揚に顎を下ろした。横暴な主人が奴隷の働きに満足する仕草だ。

これがなかつたら脳天をぶち抜いていたと言つた。

私は痛む顔を押さえながら小屋を後にした。鼻血が噴き出ていて、粘膜から伝わる苦痛で涙がこぼれている。

やり取りの最中に飛び移つたのだろう——小屋の上
に少年が乗つていた。

藁葺きの三角屋根を慎重に移動し、棍棒を持つて出入り口を見据えていた。

激しい憎しみが私の中で燃えていた。それ同時に弱虫根性も現れていた。

私も小柄だつたせいで高校の時はクラスメイトにイジメを受けたのだ。心根にはすぐに逃げ出すくせがついていた。

教師や目上の者にすがってなんとかしてきた。それが社会的に正しいはずだと、今でもそう思っていたから急場で動けない。

一時間かそこらだったか。ロドリードは目頭を押さえながら扉を開けて外に出てきた。水でも飲もうと考えていたのだろうか、ひどく汗をかいているようだった。

機を窺っていた少年がここぞとばかりに飛翔した。ロドリードの後ろ首に全体重を乗せた棍棒がクリーンヒットした。

打ちさえられたロドリードは目をむいて倒れた。首に手を回して苦痛にあえぎ、もがいている。

少年はロドリードが握っていたリボルバーを蹴り飛ばした。地面に這いつくばっているロドリードの背中をもう一発棍棒でぶん殴った。悲鳴があがった。ロドリードは身体を丸めて防御の姿勢に入っている。

ふと思いついたのか少年は銃に目を向けた。歩み寄って拾いあげ、弾数をチェックし、シリンダーを回転させて撃鉄を起こした。

そして、ロドリードの頭に狙いを定めた。

「やめろっ！」

私は叫んだ。

少年は私に視線を移した。

冷酷な目つきだった。情はなく無心でもあった。彼は紛れもなく、撃つ気だった。殺すつもりだった。

「すいません。屋根の隙間から中の様子が見えて、怒りを覚えたのです」

言葉尻まで落ち着きを払い冷静だったので——そんな風には見えなかったが、少年は銃を私に向かって放り投げた。

「瀬戸さんが持つていてください。僕が二人を解放してきます。動けないと思いますが、ロドリードさんを狙っておいてください」

「あ、ああ……」

おっかなびっくり銃口を向ける。

ロドリードは股間から排泄物を垂れ流していた。とりとめのないくぐもった声を発していた。

開いた扉から中の様子が見えた。

立花は猿轡さるくつわを嘔くわまされ、全裸になっていて身体を丸められ、膝と胸をくつつけ、荒縄で手足を縛られ、尻を突き出すポーズで固定されていた。

でん部には様々な液体が飛び散って汚れていた。ロープの結び目を外す少年を救いの神のような顔で見ていた。

射殺は仕方なく思えた。